



生徒指導部から

==未来の花を咲かせるために==

2026年1月16日

1995年1月17日の5時46分、阪神淡路大震災が発生、その後の関連死も含めて、6434名が亡くなりました。「神戸に地震は来ない」と言われ、誰もがそう信じていた街は、たった15秒の揺れで崩れ落ちました。続々と映し出される被害の状況に、ただ呆然とし、学生時代の友人が無事でいてくれることを祈ったことを覚えています。2020年には、25年に及んだ復興事業も終わり、今では異国情緒豊かな港町の姿を取り戻していますが、大切な人を震災で亡くした悲しみを乗り越え、復興を目指す中、言い尽くせないほどの困難や苦労があったことは想像に難くありません。鎮魂と追悼、街の復興を祈念して、神戸の希望を象徴する行事として開催してきた「神戸ルミナリエ」は、今年で31回目を迎えます。31年前の壊滅的な被害からの町並みの復興と幻想的な幾何学模様のイルミネーションを見たいものです。

2024年1月1日の16時10分、能登半島地震が発生、594名が亡くなり、1296名が負傷し、住宅全壊が7704棟に及びました。報道を通じて、「輪島朝市」で有名な輪島の町が灰燼に帰した様子を目にした人も多いでしょう。現在は、1200年の伝統を受け継ぐ朝市を復興させるため、出張朝市を各地で開催しながら、この困難を乗り越えようと様々な活動をされています。

「冬来たりなば春遠からじ」とは、よく耳にする言葉です。「厳しい冬が来たけれど、その次には、柔らかな日差しに包まれる暖かな春が来るよ、今はつらくても頑張ろうよ。」と私たちの心を元気に、歩みを応援してくれる言葉です。

冬に思うこと

毎年、冬になると、「今年一番の寒波が・・・」とか

「・・・では積雪が3mを超えた」となどテレビ画面を通じて、各地の冬の厳しい風景を目にします。

その一つに、毎年、1月下旬から2月上旬にオホーツク海の流氷が南下し、網走や紋別に接岸する「流氷接岸初日」があります。海上自衛隊八戸航空基地に所属する哨戒機が空中から流氷を観測し、報道されるのが1960年から恒例となっているそうです。



流氷が接岸すると海面が氷に覆われるので、漁船などの航行はできなくなります。氷の下の海は一見、氷に閉ざされて動きのない場所のように思えますが、実は流氷に覆われる期間があるからこそ、オホーツク海は海産物豊かな漁場となっているのです。

流氷は塩分濃度の薄い海水が凍ったものです。凍る過程でも塩分を排出しながら凍るので、排出された濃い海水（ブライン）が比重の関係で沈んでいくことで海水をかき回し、深いところにあった栄養塩が海の上の方に浮かんできます。そこにはあたかも畑を耕すような動きが生まれているのです。

また、流氷には植物プランクトンが付着していて、春になると一気に増殖します。流氷が離れて、船が出せるようになる頃には、増えた植物プランクトンを餌に動物プランクトンが増え、その動物プランクトンを餌に魚介類が増えて、豊かな海産物の宝庫になります。船が出せず、漁ができる間は海産資源が守られていることにもなっています。流氷に覆われている厳しい冬は、オホーツク海にとって無駄な期間ではなく、有意義でなくてはならない期間なのです。

私たちの身の回りに起こることも同じだと思います。

楽しいことは心を晴れやかにしてくれるの、そのことばかりを望んでしまいます。できることなら苦しいこと、つらいことは避けて通りたいのが正直なところです。でも、オホーツク海が氷に閉ざされた期間があるからこそ、豊かな海になるのと同じように、私たちもつらいことや苦しいことがあるからこそ、心豊かな人に成長できるのだと思います。



まだまだ心が柔らかで多感なあなたたちは、いろいろなことで悩んだり、不安定になったり、決して楽しいばかりの日々ではないことでしょう。来春からの新生活、新学年ではなおさらです。悩んだり、落ち込んだりしたときは、流氷の話を思い出して、自分の人生にとって、今こそが将来のためになくてはならない期間なのだと考えられると、ほんの少しでも心の支えになるかもしれません。

氷に閉ざされた冷たい北の海は、そんな大切なことをそっと教えてくれます。